

# 高麗演福寺鐘銘について

末松保和

一九八二年（昭和五七）六月のころ、私は朝鮮金日成総合大学科学図書館から二冊の図書の寄贈を受けた。その一冊は『朝鮮文化史』（社会科学院歴史研究所著、一九七七年九月刊、五四八頁）であり、他の一冊は『朝鮮の文化財』（平壤文化保存社、一九八〇年刊、二二八頁、二二七図）である。前者はハングルの本文に挿図を多数かかげ、後者は写真図版を主体とし、日本文の説明を加えている。通覧して私の目をひいたのは、前者の第十三章高麗時期概観の最後（二七七頁）に「南大門（開城）」と題する一頁があったことと、後者の第五十図に「開城の南大門」という一頁があったことである。前者は南大門をやや左方から写したものの、後者はやや右方から写したものである。後者の説明文（日本文）に左のごとく読まれる。

時代 李朝時代（一三九三年建築、近年再建） 位置 開城市北安洞

規模 正面三間、側面二間

これは開城の内城半月城の正門で、アーチ形の通路をもつ築台と入母屋造りの門楼からなっている。この城

高麗演福寺鐘銘について 末松

門は、築台と楼が比例よく配分されて構造にすぎがなく、城門建築の特徴である力強く荘重な建築美をそなえている。組物は内外ともに素朴な詰組一手であり、化粧屋根裏の二重梁も組物で支えられ、淡い丹青が南

大門に古色蒼然とした趣をかもしだしている。開城南大門は李朝時代初期の城門建築の特徴を示している。私がこの両図に注目したのは、かつて解放以前、この門楼の左側に付建された一屋に「演福寺鐘」と称される大鐘が存していたからであり、またその大鐘に鑄出された銘文、図紋の豊富特殊なものであったことに興味と価値とを覚えていたからである。付建の鐘楼は李朝後期の有名画家約庵姜世晃（一七三—一九一）筆「開城南大門之図」に明示されているのみでなく、李朝最末期の写真にも認められる。私は昭和のはじめ、開城の史跡めぐりに参加してこの鐘を一見したが、付建の鐘楼についての記憶は全くない。上記の『朝鮮の文化財』の写真「開城の南大門」の説明文に「近年再建」とあるのが気にかかる。というのは、この写真によれば鐘楼はともなくなっておるのみでなく、大鐘の存否については一言も言及なく、写真のみからでは大鐘の存在が確認されない。それで私は右の説明文に「近年再建」という近年は、過ぐる朝鮮戦争（一九五〇—五三）以後のことではあるまいかと疑い、大鐘も戦火を蒙って亡失したのではあるまいかと思つた。しかし最近の情報によれば、大鐘は再建の南大門に無事現存しているということである。

開城南大門鐘をはじめわが学界で紹介されたのは関野貞氏であろう。一九二〇年（大正九）刊行の『朝鮮古蹟図譜』第七冊に左の四図の写真を収めている。最小限度の写真ながら要を得た選択である。

八五二—三二二八 同 鐘龍頭

三二二九 同 鐘佛像

右の演福寺鐘についての関野氏の説明として、一九二三—二四（大正十二—三）年に刊行の『朝鮮史講座』中の「朝鮮美術史」（一六三—一六四頁）に次のごとく記している。

今開城南大門にある演福寺の鐘は銘文によれば忠穆王二年元帝鐘を金剛山に寄付せんと態々工匠を派遣したりしを幸、忠穆王は王妃と共に彼等に囑して鑄成したとのことである。口径六尺二寸全高十尺七寸普通の朝鮮鐘と異り龍頭には旗挿なく両龍左右相背きて蟠結せる者より成り鐘頭に蓮花を刻し銅部は広き数条の腰帶を繞らして上下に袈裟襷をあらはし、上部四面の郭内に各三尊仏を浮彫にし腰帶の上下の狭き帯には梵字を写している。鐘口は八個の波状をなし広き素文帯を統らし其上に波文を刻せる狭き帯ありて鐘口帯との間地にそれぞれ八卦の象をあらはしてゐる。元の工匠の手に成つたのであるから純然たる元式より成り当時の者としては音に形体の大なるのみならず技工も亦観るべき者がある。此鐘の形式は当代の梵鐘には格別の影響を与へざりしも却て次の朝鮮時代の者に大なる感化を及ぼすこととなつた。

『朝鮮古蹟図譜』七の写真四種と、右の説明文とを併せみれば、この鐘の大様は把握されるが、充分とはいえない。

この鐘の銘文・図紋は次のごとく多様複雑であり、列記すれば、頭部の縁辺の蓮花紋を除いて、胴部は八段に区分される。

(1) 題銘四区と三尊仏四区とを交互に配し、題銘は各々漢字四字から成る。

高麗演福寺鐘銘について 末松

- (イ) 皇帝万歳 (ロ) 法輪常転 (ハ) 国王千歳 (ニ) 仏日増輝 (拓本あり)
- (2) 梵字帯 (二行より成る) (拓本あり)
- (3) 腰帯三条 (拓本なし)
- (4) 梵字・藏字帯 (二行) (拓本あり)
- (5) 漢字漢文の銘を四区に分記する (拓本あり)
- (6) 竜波紋帯 (拓本あり)
- (7) 八卦文を八方に記す (拓本なし)
- (8) 口縁帯 (八頭波状をなす) (拓本なし)

いうところの銘文は、腰帯の下にあり、上部の四個の三尊仏の郭と同一形式の郭を四個設けて鑄造の由来と関係当事者の官職姓名を列記し、鐘銘としては、新羅の聖徳王神鐘銘に次ぐ内容を持っている。故にこの銘文は、一九一九年(大正八)に刊行の『朝鮮金石総覧』上、四九〇頁に収録、周知された。『朝鮮金石総覧』は海州や開城や平壤の年代不明の大仏頂陀羅尼幢の梵字は縮写石印して巻末に載せているのに、演福寺鐘のいわゆる「梵字」帯は全く無視してしまったのは恨まれる。

のみならず、この「梵字」帯については、関野氏は上記のごとく「腰帯の上下の狭き帯には梵字を写してゐる」というのみであるが、一九三五年(昭和十)に刊行された葛城末治氏の『朝鮮金石攷』の「開城演福寺鐘」の説明(五〇五頁)では、上下の腰帯の間に「又梵字と八思巴及び蒙古文字を鑄出してゐる」とあり、最近(一九七三年

(昭和四十八)に刊行された中吉功氏の『海東の仏教』の第二部海東仏教図彙の「演福寺銅鐘及拓影」の説明(二五八頁)では「上の腰帯には横に梵字を、下の腰帯には梵字と西藏文字を並書するが、これは呪文といわれている」とある。三者それぞれに異なり、何れが真実であるか採択に迷う。最後の中吉氏の説明が真実に近いようであるが、それでも充分とはいえない。幸にしてこの大鐘の拓本が八分通り天理大学にあるので、上來紹介して来た諸氏の写真と説明文と拓本との三者を併せて、この大鐘の全様を示すものは『朝鮮古蹟図譜』(第七冊)の写真四葉にまさるものはないといえる。

私は、演福寺鐘に関する解説乃至研究には美術史的と文献的と二方面の道が今後の大きな課題であることを再確認せざるを得ない。美術史的解説は改めてその方の専門家をお願いすることにして、私は文献的解説にとりかかることにした。

この段階に到達して、私は先ず東洋文庫の田川孝三氏に相談して文庫の関係研究者諸氏に教えを乞うことになり、岡田英弘、山崎元一、山口瑞鳳、田中公明、上杉隆道、ソナム師の諸氏に逐一教えを乞うたが、結局最終的には国際仏教学研究所周長湯山明氏の教示をうけるほかなきにいたった。そしてその最後の打合せとお願いのため、私は一九八四年三月十二日、国際仏教学研究所に直接湯山氏を訪問し、はじめてお目にかかった。湯山氏は即座に快諾されて別稿「演福寺銅鐘の梵語銘文覚書」の力作を同年九月十日寄与せられた。

私は湯山氏の好意と熱意に感激を新たに、演福寺そのものをもう一度文献学的に追究する必要を痛感し、改めて「演福寺考」を起稿して次のごとき課題を設定した。

第一 演福寺漢字鐘銘の解説

第二 演福寺の旧名と改名の理由

第三 演福寺の特殊性

の三箇条であつた。

この条々に関する史料あつめに熱中する間に、私は残念にも病を得て入院、退院をくり返し今日（一九八五年一月）なお入院中である。そして今のところ上記の「演福寺考」を仕上げる余力を見出す見込みがない。湯山氏にはまことに申しわけなく残念であるが、概略の経過をここに記して同氏の大作の前付けとすることをお許し願う次第である。

（一九八五年一月十五日、口述筆記による。）